

大学初年次学生の協同作業認識得点の変化

甲原定房 (山口県立大学)

キーワード：協同作業認識尺度、初年次学生、協同に否定的な学生

【目的】

甲原 (2013) は協同作業認識尺度 (長濱, 安永, 関田, 甲原, 2009) について大学1年生の経時変化を分析し, 3つの下位得点の間に協同効用が個人志向を經由し, 互恵懸念を低下させるという関係性があることを示している。本研究では, 同様の分析を行い, 一貫した結果が得られるか否か検証するとともに, 学年末に協同作業認識について否定的反応を示す学生を予測するものがあるか否かについても検討する。

【方法】

「調査への参加者」男女大学1年生。必修の通年開講される初年次教育科目にて調査依頼した。4月当初, 男性39名, 女性239名, 不明26名の合計304名であった。

「質問紙」 「協同作業認識尺度」 (長濱ら, 2009), 「大学生適応尺度」 (出口・吉田, 2005) その他の尺度で質問紙を構成し回答を求めた。回答は任意であり, 回答拒否による不利益な扱いはないことを明示した。

「調査時期」学年当初の4月, 7月, 11月, 後期末の1月に同じ質問紙に回答を求めた。

【結果】

以下, 繰り返しの分析がある場合, すべての時点でデータを提供した参加者のみが分析対象となるので分析ごとに参加者数が異なる。

「協同認識得点の推移」3つの下位尺度 (協同効用, 個人志向, 互恵懸念) について, 時期の4水準 (4, 7, 11, 1月) で分散分析を行ったところ, 統計的に有意な結果は得られていない。Figure 1に示すように大きな変化なく推移している。

「学年末の協同作業認識を規定するものは何か」

Figure 2に示す共分散構造分析を試みた (RMSE=.060, CMIN=9.921, $df=5$, $p>.07$)。協同効用が直接, 互恵懸念を低下させるだけでなく, 個人志向を經由し, 互恵懸念を低下させるという関係が年度当初だけでなく, 年度末にも再現する。

次に年度末1月の3つの下位得点が5段階尺度上の中点である3点よりも高かった参加

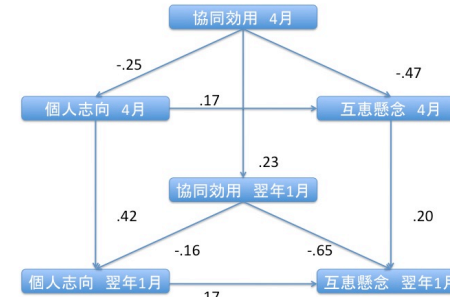
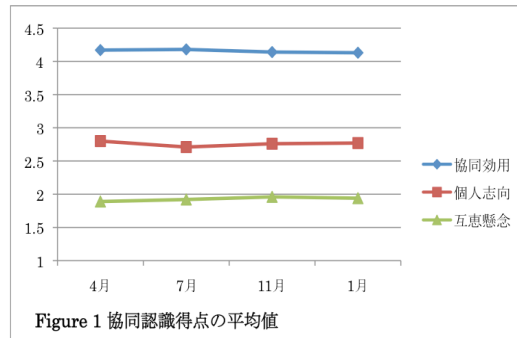


Figure 2 4月と翌年1月における3つの得点の関係
※誤差項は省略している

者をHigh群, 3点以下だった参加者をLow群と分類し, これを説明対象とした決定木 (C5.0, chaid) を作成した。先行する3つの時点での質問項目を投入した。(Figure 3 & 4 参照)

【考察】

協同効用が個人志向, 互恵懸念を規定することが再び示唆された。協同効用が協同作業認識の他の2つの側面に優先する得点である可能性がある。

決定木による分析では, 年度末において協同作業認識が否定的となる学生を弁別する要因は, 年度後半の得点あるいは年度初めの対人適応であった。

協同認識尺度の得点は一定の順序性をもちながら変化している。また, 入学当初の協同作業認識得点はその後の得点に影響するものの, 学年末の否定的状態を予測することはできず, 一方で入学直後の対人的適応が年度末の状態に関係を持っている。

これらの結果は, 協同に関わる元々の個人的認識だけでなく, 入学当初の周囲の学生との適応が協同に否定的な大学生を生み出している可能性を示している。協同的な高校生がそのまま協同的な大学生になる訳ではない。

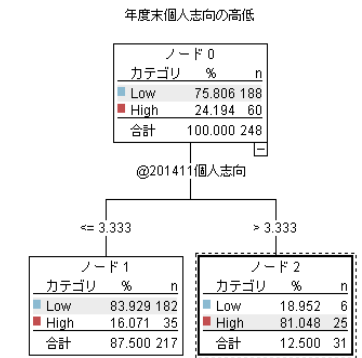


Figure 3 個人思考の決定木

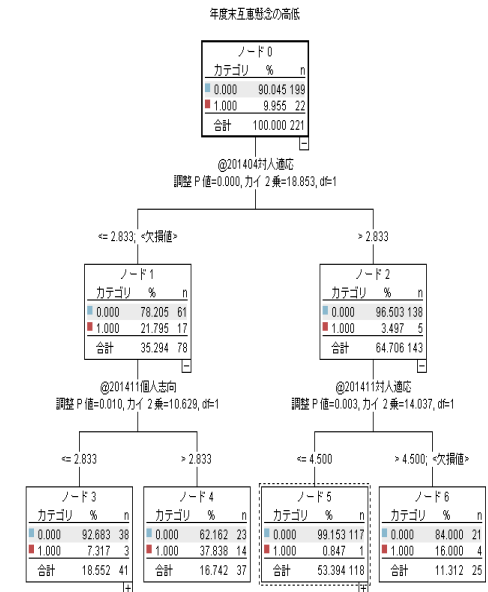


Figure 4 互恵懸念の決定木
(1.0はHigh群を, 0.0はLow群を表す)